

「ようこそ現代美術へ ーアメリカの夢」

主 催：静岡県立美術館
会 期：平成16年7月21日(水)～8月8日(日)
会 場：静岡県立美術館 県民ギャラリー

7月21日から8月8日まで、県民ギャラリーを会場に、収蔵品展「ようこそ現代美術へーアメリカの夢」展を開催した。当館の現代美術コレクションのなかから戦後アメリカに渡って活躍した日本人作家と同時代のアメリカ人作家の作品を約20点を展示した。県民ギャラリーを会場にして収蔵品展を開くのは美術館としても実に10年ぶり。展示プランの作成段階から、県民ギャラリーの明るく開放的な場の特性を生かしながら、なおかつ個々の作品の個性が引き立つようにという思いで取り組んだ。県民ギャラリーの蛍光灯の白味を帯びた光は予想していた以上に、出展作品の草間彌生やモーリス・ルイスの大きな画面の絵画と相性が良く、二階の展示室での展示とは一味違った作品の魅力を引き出せたように思う。当館のリピーターのお客様から、「上のフロアで見た時と作品の印象がぜんぜん違うわ。」といった感想をいただいた。企画者にとっては、作品と展示される場所との関係がいかに重要かという点について考えるきっかけとなった展覧会であった。

また、この展覧会では、夏休み子どもワークショップを組み合わせ、出展作品と関連付けた子ども向け普及プログラムを行った。この普及活動には、地域連携の意図も込めて募った静岡文化芸術大学と静岡大学の学生ボランティアに参加してもらい、鑑賞者の視点に立った手作りの鑑賞講座を企画してもらった。100人近くの子供達が参加したこの子ども向け普及プログラムに加えて、静岡にゆかりのある4人の講師をお招きし、展覧会場で作品を前にしたレクチャーを期間中計4回開催した。

同展の準備にあたって当館ボランティアが広報活動を中心に心強いサポーター振りを発揮してくれたことは何よりも特筆に値する。近隣の学校やマスコミに飛び込みで宣伝活動に出向いたり、口コミ情報を広げるといった地道な活動で力添えをしてくれたほか、展示プランの作成に際しても、彼らボランティアの熱意によって大いに影響を受けた。その一例としては、心地よい環境で鑑賞したいという彼らの要望に突き動かされ、普段は館内ロビーや廊下に常置しているル・コルビジェのスリングチェアやミス・ファンデルローエのバルセロナチェアを展示室に引っ張り込み設置したほか、会場で時間を限定して音楽を流すといった試みも行なった。筆者としても、当館で初めて手がける展

覧会であり、手さぐりをしながらの展開であったが、展示、普及、ボランティアとの共同作業、様々な観点からふりかえってみて、今後の活動のベース作りにふさわしい展覧会であったといえる。また、これから先当館が地域との連携を進めていく上での足がかりとなった。

■関連記事

朝日新聞「大学生が現代美術ガイド」 平成16年8月6日
朝日新聞「仕事考えさせた文芸大生」 平成16年10月22日

■関連事業

連続レクチャー (いずれも県民ギャラリー)

第1回 7月3日(土) 15:00～16:00

柳澤紀子(武蔵野美術大学油絵学科教授)

「イサム・ノグチ、篠原有司男、岡田謙三の思い出」

第2回 7月25日(日) 13:30～14:30

上田 肇(静岡大学人文学部教授)

「現代アメリカ文学に見る「アメリカの夢」
ーニューヨークの作家たちを中心に」

第3回 8月7日(土) 15:00～16:30

広本伸幸(株エムアウト絵画事業部担当ディレクター)

「ジャッドとステラ二人から聞いた内緒話」

第4回 8月8日(日) 13:30～14:30

上田雄三(ギャラリーQ、インディペンデント・キュレーター)

「アメリカ現代美術の制作現場ー河原温を中心に」

■出品目録 P.101 参照



▲ チラシ